

## 序文にかえて—井上正蔵先生と私—

石川 惣 太 郎

井上正蔵先生は、昭和五十八年三月、本学を定年でご退任になった。

井上先生を法学部へお迎えしたのは五十二年四月のことだから、ご在職は六年をかぞえる。

先生は、法学部ではドイツ語を担当された。

深い学識と直情的な虚飾のないお人柄で、教職員や学生の敬愛を集めておられた。

先生と私とは、専攻する学問の分野がまったく違ふところから、平素昵懇というほどではなかった。

私のほうでは、林睦美氏が「古くから定評のあるハイネの名訳者であり、そしてまた国際的、比較文学的視野をもつニッポンの誇るべきドイツ文学者として、氏がこれまでに残してこられた足跡はとてつもなく大きい」として、されているところ（井上正蔵訳ハイネ全詩集第五巻綴込月報所収）などによって、碩学「ショーツオー・イノウエ」を、距離を置いて畏仰するにとどまった。

そのようなある日、無声映画、それも剣戟物のかかっている日比谷の映画館で、偶然、先生をおみかけした。それからしばらくして浅草公会堂の無声映画大会で先生とすれ違った。

しかし、この典雅な西欧型紳士とまげ物無声映画では、イメージとしてほとんど結びつかない。

ところが、その後、学校の行き帰りに先生とご一緒した折、先生が下町のお生まれ、育ちで幼少時からの映画好

きとうけたまわって、先生に親近感を覚えるようになった。

ただし、下町といっても、先生の場合は、京橋あたりの由緒正しい土地柄で、下町ということばからしばしば連想される共同井戸やどぶ板とは縁がなさそうである。先生の『わが下町抄』によれば「築地から茅場町へ通じる電車通りが町の中心部を横断し、その街路を軸として基盤の目のように縦横に商店街と花柳界が相半ばしてひろがり、独特の下町の風情をつくりあげていた」ような新富町界限である。

もっとも、先生は、少年期以後、府立六中（旧制）から府立高校（旧制）へ進まれている。両校とも当時の東京では、山手色の強い、垢抜けした校風で著名だったとつたえられている。六中の所在は新宿、府立高校は当初日比谷、のち目黒だから、先生は旧制中学からさきは、ひそかな山手志向に基づいた選択をされたのではあるまいか。

いずれにしても、下町情緒と山手気質をほどよくミックスし、これを洋風に仕上げた人物像を想定すると、そのまま井上先生の風貌姿態に通じてしまう。だから、先生の端正な拳措語調と含羞の微笑のあいまに、どうかすると伝法な息づかいがまじっても不思議ではないと私は思っている。

かつて、私は、たしなみもなく先生と文学談義に及びかけたことがある。

さすがに、話が軌道に乗る前に、私は気恥しくて、ことば少なになってしまったし、先生のほうでも、門外漢の私との厄介なやりとりにつきまきこまれたくなかったに違いなく、話題は自然に当たりさわりのない方向に転じてしまった。

しかし、そのようなときでも、先生から「素人になにがわかるか」式の、学者にみられがちな倨傲の気配を感じることは少しもなかった。

先生は、ご退任近いころ、「ドイツ語はもうたくさんだ」といわれた。これは一種の韜晦であろうが、同時に

「今後は荷風研究を深めたい」ともらされたのは、ご本心からであろう。

先生が、荷風の研究者としても一家を成しておられることは、迂闊にも存じ上げなかった。先生の、荷風と浅草への傾倒は、往昔の東大生時代からのようであって、そのことは、そのころ、先生とともに六区のしかるべきちまたを徘徊された登張正實先生の佳篇「無為にして化す」(登張著『潮騒集』所収)のなかで指摘されている。以来、先生の、荷風に対するただならぬ思い入れは、先生の、おそらくは荷風と共通する豊かな教養と溼畔慕情の辿る当然の道すじだったということになるうか(もったも、井上先生ご自身は、荷風を、いわゆる「教養人」とはみておられないようであるが)。

荷風については、私は、あの晩年の奇矯な言動と陋巷窮死をあしざまに書いた諸家の文章が記憶にあって、複雑な印象を持っているが、井上先生の荷風研究は、先生のお人柄から考えても、おおむね肯定的なトーンでつらぬかれているものと勝手に推察申し上げている。

